

# 長崎県版 目次

心を育てる道徳教材集

1 わたしはお姉ちゃん……………2

2 精霊流し……………8

長崎っ子に贈る50の話

3 おはようおじさん……………14

情報モラル指導教材及びトラブル対応マニュアル

4 かつとなつて、つい……………18

5 ちょっとしたこと……………20

# 1 わたしは お姉ちゃん

みほは、お母さんのおなかに手をあて、話しかけました。

お母さんのおなかの ちょうどおへそのあたり。

「あかちゃん、こんにちは。今、何をしているの？」

すると、お母さんは、みほに言いました。

「あかちゃんが、お話ししているわよ。『おねえちゃん』って」

「えっ、お母さん、どうしてわかるの？」

お母さんは、みほをそつとだきよせました。

「あかちゃんは、まだ、言葉は話せないけれど、足でお返事ができるのよ。」

「足でお返事するの？」

みほは、おどろいて、お母さんのおなかをじつと見つめました。

「そうよ。みほも元気に足でお返事していたのよ。」

みほが、お母さんのおなかの中にいるとき、

お父さんもお母さんも、うれしくてたくさん話しかけたのよ。

『みほちゃん、元気ですか？』って。

みほは、足でお母さんのおなかを

『ぽおん』ってけって、

『はあい。元気ですよ』って教えてくれたのよ。

みほが、お母さんのおなかの中で、

少しずつ大きくなって、そして生まれてきてくれて、

お父さんもお母さんも

みんなが、とつてもよろこんだのよ。」

「ねえ、お母さん。みほが生まれてきてしあわせ？」

「もちろん、しあわせよ。」

みほは、お父さんとお母さんにとって、

とても大切な人。

ほかのどんなものより大事な大事ないのちよ。」

みほは、もう一度お母さんのおなかに、そつと手をあて、顔を近づけてやさしく話しかけました。

「あかちゃん、こんにちは。」

わたしは、あなたのお姉ちゃんよ。

世界でたった一人のあなたのお姉ちゃんですよ。」

お母さんのおなかが、「ぽおん」とふくらんで、みほのほつぺたにも、赤ちゃんの元気なお返事が返ってきました。



お母さんからの手紙　く親から子へのメッセージく

ひかる、おたん生日おめでとう。

あなたがおなかにいるとき、  
ときどき動くあなたを感じながら

あなたがぶじに生まれるよう

お母さんは、毎日、おなかをさすっていました。

「元気に生まれてね。」って

何ども声をかけました。

あなたが生まれたとき、

うれしくて、なみだがでました。

顔をまっ赤にして力いっぱいなくあなた、  
いっしょうけんめいおっぱいをすうあなたは、  
まぶしくて、かがやいて見えました。  
だから、「ひかる」と名前をつけました。

あれから九年たちました。

自転車てんに乗のれるよう何回も練習れんしゅうしているとき、

お母さんもどんなにおうえんしたとか。

ころんでも立ち上がるすがたにせい長かんを感じました。

あなたが友だちにいじわるしたと聞いたとき、

お母さんはどんなにかなしかったか。

そして、どんなにくやしかったか。

でも、すなおにあやまるあなたを見て、  
少し安心あんしんしました。

病気びょうきやけがをするたびに心配しんぱいし、  
ときにはこまらせられることもあるけれど、  
そんなこともお父さんとお母さんの  
よろこびなのです。  
あなたは、お父さんとお母さんの  
大切な子どもなのです。

ひかる、

これからも、キラキラとかがやいて生きてほしいな。



## 2 精霊流し

バババツ、バーン！

長崎のおぼんには、にぎやかな爆竹の音がなりひびきます。

良介は、毎年、家族三人で精霊流しを見に行くのがとても楽しみでした。大きな船、小さな船、いろいろな形の船が町をいき、ふだんはできない爆竹もさせてもらえるからです。

でも、今年のおぼんはいつもとはちがっていました。大好きなお母さんが、病気で入院してベッドの上だったからです。良介は毎日のようにお母さんに会いに行きました。

「お母さん、今日ね、お菓子もろつたよ。お母さん、食べてよ。」



「ありがとう。でもお母さんはねえ。ごめんね。」

半年前からお母さんは、病気のせいで自由に物が食べられないです。

「明日は精霊流しよね。お母さんの分まで見てきてね。良介。」

そういつてお母さんは花火代を良介の手のひらにおいて、ぎゅっと手をにぎり  
ました。良介は急に悲しくなってしまうました。そして、その悲しみは家に帰  
つても続きました。

（今年しんねんは精霊流ししんれいりゅうしにみんなで行けない。お母さん、帰ってきて。）

部屋のすみでひざをかかえてないている良介にお父さんが言いました。

「いつしよに精霊流しに行けなくて一番悲しいのは、お母さんだよ。」

その言葉を聞いて良介は、何かお母さんを喜ばせたい。お母さんのために何  
かしたいと思いました。ある考えが思いつかびました。

おぼんがすぎて一週間後、良介りょうすけの願ねがいが通じたのか、お母さんが帰ってきました。良介りょうすけはうれしくてたまりません。部へ屋やをきれいにそうじしました。今までの分をとりもどすようにたくさん話をしました。

「お母さん、精し霊りゆう流ながしば見よう。ぼくがビデオにつておいたとよ。」

「ええっ！うれしかねえ。お母さん、見たかったなあ。ありがとうね。」

お母さんとお父さんと良介は、良介がとったビデオを三人で見ました。



バババツ、バーン！

目をとじると、ほんとうに家族みんなで精霊流しを見に行っているようでした。お母さんの手が良介の手にそつと重なりました。お父さんも良介の手をにぎりました。お母さんの目にはなみだが光っていました。

それから一週間家にいて、お母さんはまた入院しました。おなかがばんばんにはれて苦しくなったのです。そして、その日の夜おそく、お母さんは死にました。

「お母さん！お母さん！」

お父さんと良介は何度も何度もお母さんの体をゆすって声をかけました。でも、お母さんが二度と目をあけることはありませんでした。

次の年の夏、良介の家ではお母さんの精霊船しんれいぶねが作られていました。

「お母さんのたましいば、この船でしっかり送ってやろうな、良介。」

船作りを手伝ってくれたおじさんの言葉に良介はうなずきました。

そして、おぼんの十五日。今年も長崎ながさきにはにぎやかな爆竹ばくちくの音がひびいています。いよいよ出発しゅつぱつの時刻じこくです。お父さんがみなに声をかけます。

「さあ、行こう！お母さんが生まれ育そだったところを回ってやろう！」

良介は「お母さんへ」と書いた紙ひこうきをそっと船に入れました。そして、木づちをにぎりしめると、力強くかねをたたきはじめました。

「見とつてね。お母さん。お母さん！」

長崎ながさきの美しい夕空ゆふぞらに消きえていきました。  
にぎやかな爆竹ぼくちくの音ねとともに、良介のお母さんへの思いがこもったかねの音ねが

### 3 おはようおじさん

氏田 裕也

これは今から三十年ほど前の、平戸市津吉町での話です。昭和五十年、この町に「電話局」が開設され、おじさんは初代局長としてここに赴任しました。おじさんの名前は、角田実さんといっています。

赴任して間もない日の朝、おじさんが局の前に立っていると、名前も知らない子どもの「おはようございます」と、とても元気な朝のあいさつが耳に飛び込んできました。おじさんは、びっくりしながらも負けずに「元気よくおはよう」とあいさつを返し、その子を見送りました。おじさんは、いろいろな町で仕事をしてきましたが、こんな気持ちのよいあいさつを経験したのは初めてで、このあいさつにとっても感激したのです。

この子との元気な「おはよう」のあいさつで、おじさんは決意しました。「あいさつはすばらしい。自分もあの子に負けないあいさつをしよう。あいさつのすばらしさを多くの

子どもたちに伝えよう。」

次の日から、おじさんは毎日、子どもが登校する時間と子どもが下校する時間に、局の前に立ち続けました。雨の日も風が強い日も、お日さまがじりじり照りつける日も凍りつくような寒い日も。お天気は関係ありませんでした。朝は、「おはよう」に「車に気をつけて」などの言葉をつけ加えました。帰りには「おかえり」「さようなら」に「道草するなよ」などの言葉をつけ加えました。雨で濡れて帰る子どもがいたら、かさを貸してあげることもありました。ただ、あいさつを交わすだけではなかったのです。

「おはよう」の輪は一人の子どもから、二人、三人と広がり、小学生のみんなに広がっていきました。さらに、中学生や地域の人も広がり、津吉の町には今まで以上にあいさつの声が飛び交うようになり、いつそう明るい町になりました。

おじさんは、いつも明るく元気にあいさつをする津吉の子どもたちが、ますます好きに

なり、もつと子どもたちを応援したいという気持ちになりました。運動会や卒業式などの学校行事や地域の行事には必ず出席をし、「がんばれ」「おめでとう」と温かく力強く励まし続けました。卒業生には、「卒業おめでとう」の心のこもった手紙も送りました。

おじさんは、三年後に長崎市へ転勤しました。津吉の町を去った後も、多くの子どもたちと文通を続け、就職した時や成人式の時には、手紙に記念品を添えてお祝いを伝え続けました。また、時間をつくって、その後も元気なあいさつを続けているか見に来ることもありました。変わらない「おはよう」「さようなら」の声を聞くと安心して長崎へ帰って行きました。

あの時の子どもたちも今は、お父さんお母さんになっっています。今は、その子どもたちがああ時に負けない、明るく元気なあいさつを続け教えを受け継いでいます。

おじさんは、今から十四年前、津吉の町のあいさつ運動がいつまでも続くようになると願いながら、七十三歳で亡くなりました。その後、お父さん、お母さん、地域の人たちは、お



じさんの教えと感謝の気持ちを忘れないようにしよう。と記念碑を建てました。そこにはおじさんの思いが込められた「あいさつの三徳」の言葉が刻まれ、津吉小学校の校庭で、今も子どもたちを応援しています。

## あいさつの三徳

あいさつには三つの徳がある

- 一 気持ちのよいあいさつは  
相手の心を明るくする
- 二 気持ちのよいあいさつをする人は  
誰からも好かれる
- 三 気持ちのよいあいさつをすれば  
自分の心も豊かになる

おはようおじさん  
角田 実



## 4 かつとなって、つい・・・

ゆうこさんは、ちょっとしたこと、同級生のさゆりさんとけんかになり、負けてしまいました。家に帰ってから、ゆうこさんはくやしさがおさまりません。そこで、友だちあてのいつものメールに、「さゆりはテスト中にカンニングをしている。」「友だちから借りたものを返さずに使っている。」「などの悪口を送りました。

すると、さゆりさんのことをよく知らないその友だちは、ほかの友だちにも「さゆりは悪い子だ。」というメールを送ってしまいました。

あとで、ゆうこさんは自分が友だちに送ったメールを読み直して、「ちょっとひどいことを書きすぎたかな。」と反省しましたが、すぐにそのことは忘れてしまいました。

次の日、ゆうこさんは、クラスの子から「さゆりとは友だちにならない方がいいよ。」



と聞かされ、おどろきました。

次つぎのことについて 話し合ってみましょう

1 なぜ、ゆうこさんはおどろいたのでしょうか。

2 あなたがゆうこさんなら、また、ゆうこさんの友だちなら、どうしましたか。

3 クラスのみんなの意見いけんや、先生の話はなしを聞いて、思ったことを書きましょう。

## 5 ちょっとしたこと・・・

さとし君はうちゅうが大好きです。学校でもうちゅうについて話がしたいのですが、きょう味を持っている人がいません。

ある日、インターネットの掲示板で「うちゅうについて話しませんか。」と書いてあるページを見つけ、さっそく自分の考えを書きこむことにしました。

さとし君は自分が知っていることをたくさん書きこんだり、しつ問に答えたりしてとても楽しくなりました。数日後、たろう君という男の子から「火星人はいると思いますか。」としつ問をされました。

そこで「いるわけではないよ。」と、答えを書きこみました。「でも、テレビでは、いるって言っていたよ。」と返事が来たので、「あんなのおもしろくしているだけだよ。だいたい、



お前は変へんなしつ問もんが多くてうるさいんだよ。「とじょう談交だんまじりで返事へんじをしてしま  
いました。

その日以いらい来、たろう君くんは掲示板けいじばんに書きこみをしなくなりました。

次つぎのことについて 話し合あってみましょう

1 なぜ、たろう君くんは掲示板けいじばんに参加さんかしなくなったのでしょうか。

2 掲示板けいじばんに書きこみをする場合ばあにはどのようなことことに注意ちゅういしたらよいでしょうか。